

男女共同参画の問題について

科学技術社会研究所の研修会の話題の一つに男女共同参画の問題があった。

以下はそれらの議論を踏まえてまとめ、更なる議論に供するものである。

1. 今、男と女のどちらが幸せか？

1903年にキュリー夫人がノーベル物理学賞を受賞したとき、女に偉業が果たせる訳がないとの偏見は現在以上に強くあって、夫のピエールのおかげだという云い方が少なくなかったと云います。勿論、二度目にもらったノーベル化学賞（1911年）は、ピエールが交通事故で亡くなった（1906年）後の研究活動に対してであることが明らかなので、マリー・キュリーは女性蔑視的な見方にカウンターパンチを食らわせました。女には男と変わらない実力があることは確かだと思いますが、女性にとって社会は昔も今もとても重たいと云わざるを得ません。

女には、出産・育児・家事などの役割に加えて、このような偏見と闘うことも必要なもので、非常に優れた女性、並の男の及びもつかない女性しか頭角を現すことができません。ですから、かなり物わかりが良い今の社会の中でも、女性は未だに学会やビジネス社会のマジョリティになり得ません。例えば悪いですが、奴隷を先祖として持ち長い間社会の裾野に置かれてきた欧米の黒人も、今は表向き平等ですが、社会の重要な活動ではマジョリティになり得ていないのと同じです。

今、男と女の性差は無いなどと極端に走る闘志溢れるジェンダー思想家が活躍できる場所もあります。それは、これまでの偏りを反省する中での揺り戻しの現象でしょう。

しかし、偏りがどのようなものであるにせよ、女も男もその偏りによって、おかしな生活を余儀なくされています。例えば、女に色々な家事を押しつけて男は外で働くのを甲斐性であるとすることによって、女は家庭に縛り付けられたかもしれませんが、男は家庭から放り出されてきたのです。女は「亭主を尻に敷き」、「亭主元気で留守がよい」と、表向き家に縛り付けられる状態を逆転有利に導く戦略をとったのは成功だったと云うべきでしょう。男はと云えば、家に場所が無くなって、だらだらとワーカホリックをやるか呑み会でウダをあげる事しか出来なかったのです。今如何に男社会に見えても、男は単調労働でバカ同然になり、ワーカホリックで疲れっぱなし、家では陰の薄い存在で、決して成功していません。女は逆に、損しているようでありながら、実質的に謳歌しています。女友達のグループで会食、遊び、観劇、旅行などをする活発さを見れば、一目瞭然です。

一方、成功しているように見える女も、ひと頃流行語となった“オバタリアン”という愛情と同情に溢れた言葉が表すように、元気溢れつつしかし社会性に乏しい自己中心型の偏りを持って生きています。それを、女なのだから、という社会の理解ないし同情があるのを良いことにしている不屈きな女も少なくありません。この類はいずれ淘汰されるだろうという希望はあまり無いでしょう。“利己的なDNA”の戦略では、オバタリアン的な行動こそ望ましいものなのですから。

2. 今なぜ“男女共同参画”が云われるのか？

さて、とりあえず女性にとってハッピーな状態であるとして、何故今、ジェンダーフリーが強調され、男女参画が課題とならなければならないのでしょうか？これこそ本当に問うべき問題のように思います。

答えは、そのようなハッピーな女達を、産業社会の生産活動に組み込むことが必要になってきたからに他なりません。“高度経済成長”の旗の下に行進してきた男戦士の労働力は、今くたびれてきて既に限界にあります。“高度経済成長”の旗自体が色あせてしまっただけでなく、その向かっていく先が見えないので、旗の下に集まる動機も志気も薄くなっています。それがフリーターやニートを生み出す本当の背景です。しかしそれに加えて、“少子化”が追い打ちをかけて産業界には脅威になると認識されています。だからこれからは、女も働かせる、という訳です。これまでハッピーであった女達も、次には“経済成長”という、人間自身が産み出した化け物の生け贄に捧げられるのです。

おそらく、“労働力資源”として見たとき、女には今余裕がありますから、女がもっと(そしてもっと安く)働くことは可能です。以前は男の仕事だったトラックの運転手・電気配線工事・路上工事現場での警備や交通整理などに女が多数進出しているのは、たくましく頼もしく見えるけれど、新卒の安い労働力が駆り出されている姿として見ると、もの悲しくなります。男の職場に女が進出する一方、パートタイムや時間給の人材派遣など以前から女の職場であったところでも、日々雇用から時間雇用へ、時間雇用は週30時間契約まで、しかし契約時間を超過する勤務は常習的になっているなど、徹底的に安く使われることがほとんど行き渡っています。このパラグラフの初めに、女には今余裕があると書いたけれども、既に疲れ切っている女も多くなってきていることも確かです。

労働力としての男の精力を吸い尽くし、これからは女にも期待することが“経済成長”社会の本音だとしたら、とても危険です。本当の男女参画は産業界の意向に沿うようなものとは違いますよ、行政はもっと本質的に考えなくてははいけませんよ、マスコミは“男女共同参画”をおおる尻軽の間抜けを止めなさい、と云うべきではないでしょうか？

猪口邦子女史がなった“少子化・男女共同参画”担当相はとてもおかしい。これをおかしいと思わない人が多いこと自体が社会のねじれを証明しています。少子化は困るから女は二人以上産め、しかし男女共同参画も必要だという二律背反の“常識”に、いちいち疑問符をつけて吟味しなくてはならない社会に、私たちは住んでいるのです。少子化で困るのも“男女共同参画”が必要なのも、経済発展を至上としている今の社会のイデオロギーの帰結でしかないという、根本の認識に立ち返らないと、この問題は解けないでしょう。

男女の協力関係が、時と場所によってはゆがめられ偏っていた例が過去において多数あることは否定できません。男達は狩りとか戦争とかいう有事の活躍を分担し、日常の家事は女達にやらせることが合意された社会が多かったでしょう。また例えば江戸時代の人々について、女は毎日の家事や洗濯で手をあかぎれや霜焼けだらけにしていたらうし、男達は疲れ切って森に入り野を耕していたと想定できます。しかしそのような厳しい労働条件の中で、それなりに“男女共同参画”があったでしょう。そういう意味では、男女共同参画が無い社会はなかった筈です。何時だって、男と女は、偏りとバランスの中で助け合って生きなくてはならなかったのです。

今の日本の社会で、本当に男や女の幸せのために“男女共同参画”を云うのであれば、男達の働き過ぎ、男達の家庭からの遊離をこそ問題にしなくてはならないでしょう。解決すべき問題は男の側にも多くあるのです。我々男女は“何をしたいのか”を自らの問題として率直にやればよくて、“産業界・行政が主導するところの男女共同参画”には一線を画すべきでしょう。かつ望むらくは行政の誤った視点に影響を与えないものです。

3. 男と女の能力と性質

以上のように、今の“男女共同参画”問題は現在の社会のイデオロギーを背景にして出てきているものです。このことに気付かないで、原理的な問題として“男女共同”論議に参加すると、足をさらわれてしまいます。しかし以下では、そのような注意書きをした上で、男女の共同を原理的に考えてみましょう。

最初にキュリー夫人を例に引いたように、頭脳的な能力は男も女も差が無いと思われまゝです。普通の労働を考えた場合でも、男の体力・腕力がモノを云ったのは昔のことで、男でさえ機械の力にかなわない今は、女に腕力が無くても労働するにはちっとも困らなくなりました。大型のトラックやクレーンを操作する作業などにおいて、体力・腕力という男女の明白な差違が実はあまり問題にならなくなったというのは、科学技術の誇るべき成果でしょう。逆に、女の“持久力”や“真面目さ”がモノを云うことさえあるようです。マラソンを見てみると、女の“持久力”は生物学的な原因があるように思われることがありますが、実際学説はそのような見方を支持しています。一方、“真面目さ”に生物学的な理由があるという話は聞いたことがありません。多分、これまで女は社会的な弱者であることを自覚し、それを受け容れる努力と共に成長しなくてはならなかったことに依るところ大なのでしょう。従って、将来とも女が真面目である続ける保証はないものの、今のところ“真面目”は平均的に女の美点というべきでしょう。ここで、再度ピエールとマリー・キュリーの関係思い起こすことは意味があるでしょう。物理学者ピエールの原理的理解と精密計測器の発明における卓越した才能と、化学者マリーの強い意志と忍耐力とが補いあっていった形は、決して同質のものを足し算しただけの共同ではなかったと思われるのです。マリーは研究者の素質として優れて女性的であったわけですから。

もう一つ生物学的な起源ではないかと思える女の性質に、感覚的な判断ないし気まぐれというものがあります。これを良く表現して、女は自己完結型の存在だと云います。一人の女個人の主観的な感性世界の中ではある調和があつて、外から見るととても気まぐれに映るけれども、本人には矛盾が感じられないという意味です。この女の感性が女の可愛らしさとか優しさの基礎になっていて、それが男にとって癒しになることも多いので、男は、時に疎ましくはあるものの、女のこの特質を排除する愚を犯すことは出来ません。良く出来ているものです。しかし、この女が仕事上の上司または同僚になると厄介なことになります。気まぐれを相手にしなくてはならない部下の神経がすり減り、この女性上司が統率力を失う危険も少なくありません。しかし男を相手としたところで、別の厄介があるので、どちらが良いのかと比べることもできないでしょう。そもそも上司や同僚の良し悪しは、個々の性向を克服して、洗練された社会関係のコンテキストにおいてあるべきなのですから、上司が気まぐれだなどという些末な問題はレベルの低いことをやっていると言わなく

てはなりません。

このように考えると、男女の性差は本来明らかにあるものの、科学技術は性差を克服する力を人間に与えており、社会活動の多くの場面では性差を問題にする必要がないことが多いと整理して良いでしょう。本来的な性差は当然のこととしてありながらも、男も女も、それぞれの形で強くかつやさしく、双方理解し補い合う形こそ、本当の“男女共同参画”だと思ふのです。おそらく、このことを最も良く実現しているのは、デンマークやスウェーデンなど北欧諸国でしょう。男は優しさを、女はバイタリテイを付け加えて、活性度の高い社会が築き上げられています。

今日本で喧伝されている“男女共同参画”はこれとは全く違うモノです。昔の南部米国の奴隷搾取やスタインベックの“怒りのぶどう”の社会、南アフリカのプランテーション、日本でも例えば炭坑で女達が男達と一緒に裸同然で汗と粉塵にまみれて働かなくてはならなかったのは、それほど遠い昔ではありません。今、あからさまな搾取・むち打ち・裸の労働などという前近代的な形は表向き無くなって、搾取はより洗練されています。しかし、今喧伝されている“男女共同参画”はこの系統の末裔であると認識すると、物事がよりよく見えてきます。幻想としての幸せを目の前にぶら下げられて働かされつつ、なんとか食べられるのだから昔の酷いときに比べたらましだと考えることも可能だし、これほど発展し文明化したにも関わらずまだ搾取を続けようとするのかと異議申し立てすることも可能です。

4．科学技術社会での男女参画

トリノオリンピックへの日本選手団は男 59 名・女 53 名、男女ほぼ半々で、実にスポーツの世界での日本の女の活躍はめざましいものがあります。しかし、国連による女性進出度調査では日本は先進国の中で最下位にランクされていますし、科学技術の世界では、昔に比べると女性研究者は随分増えたものの、それでも日本の女性研究者の割合は現在 12% である、と、このように展開されてくると、次に出てくる言葉は何時も同じで“女性の力をもっと活用しなくてはならない、研究の分野だけでなく社会のさまざまな分野で”という常套句になります。

ここでは、前節で述べたような労働力として女を駆り立てるイデオロギーのことは忘れることにしましょう。女性の活力を利用しかつ高めることは至極当然のことに思われるし、社会全体がジェンダーフリーを叫びわっているので、学術社会も女性を遇することに大いに意を用いています。能力のある女性を発掘しエンカレジすることは、学術社会では今相当意識的に行われていると云ってよいでしょう。大学や研究所の人事に女性が応募すると、“女性の社会参加を積極的に促すことが推奨されている今日、当該女性候補に対して応分の評価をいただきたい”などと推薦文に書いて社会的な風潮を女の武器に転用する、ねじれた例さえ少なくありません。しかしこのようなことは例外として、明らかに、本当に力のある女性研究者が多数輩出しており、それは大いに嘉すべきことです。

しかし物事には必ず影の部分があることはここでも真理です。頑張っている女性研究者が、同僚の男性研究者と互角に勝負していくには相当の苦勞が要求されます。子供を幼稚園や保育園に送り迎えし、小学生や中学生の子供に必要な愛情をそそぎ込む時間を確保す

るために、職場は定時出勤・定時帰宅するだけで生活時間が塗りつぶされてしまいます。研究の男神（女神ではないように思われるので）は、それに没頭し時に食べる時間を忘れ徹夜も厭わないエジソン型の人により多く微笑みかけるものです。身も蓋もない云い方をすれば、たくさん宝くじを買った人が当たりやすいのと同じことです。女性研究者は、理解ある男性パートナーをも道連れにして、くじに当たる確率の少ない道を行かなくてはならないように定められているかのようです。ですから、本当に力のある女性（とパートナーの男性）しかこの道を歩めないのです。

このような厳しい状況があるので、公平に見て達成度が今ひとつ足りない女性研究者も少なくありません。これはおそらくその女性の能力が足りないのではなく、研究者キャリアへの激しい競争に参加することが実に容易ではなく、（どの社会でもそうであるように）時にはえげつないこともあるので、野心の強くない女性は初めからそこそこの位置に甘んじる準備があり、逆にそこから出てくる甘えもあるのではないかと思えることが少なくありません。もちろん野心が強くないとはいけないと云うことではありません。つまらない競争に参加しないで本当にやりたいことをやるという姿勢もあり得て、それは非常に貴重です。そのような女性研究者の例として、内分泌ホルモン様の人工化学物質が環境に放出されて魚類等の雌化が引き起こされると主張した“ Our Stolen Future ”の著者 Theo Colburn を挙げることができるかもしれません。学会での業績も少なく名もないおばさん研究者が突如出版したこの本に対して、学会は科学的厳密性に欠けるとしてバッシングしているのですが、今の場合、常識にとらわれない斬新なアイデアが学会や権威の外側から出てくる例として見るだけで十分です。そのアイデアが正しいか間違っているかは、次の段階の問題でしょう。しかし残念ながら、野心の強くない女性研究者（もちろん男性だって良いのですが）が地道に仕事をするような好ましい研究スタイルは、今後ますます期待できそうもありません。成果主義に基づいて厳しく評価される社会に向かっているのですから。

ところでこれとは別に、諦念もなく甘えもない女性には、次の困難が待ちかまえています。出来るだけ女性を活用すべしという良き意図に従って、数少ない優れた女性研究者がハントされ、大して意味があるわけでもない多くの委員会活動などに駆り出されるのです。諦念もなく甘えもないこの女性は名声とキャリア向上へのこのチャンスを逃す筈はなく、従ってますます大変なことになり、並の男以上に頑張らなくてはならなくなります。そのような形で本来の研究に厚みを欠いてしまった著名な女性研究者の名前を挙げることは可能です。ジェンダーフリー社会は悪意に依らずに女性研究者をスポイルしてしまうこともあるのです。そういうことにめげない有能な女性も居るわけですが、いずれにしても、有能な女は、有能であるだけに大変な努力をしなくてはならないことは確かでしょう。そのような女の困難は、普通に有能な男の比ではありません。

だから、女の研究者が少ないのは当然のことなのです。行政が“ 男女共同参画 ”をうたいあげて促進しようとしても、無理に引っ張ると摩擦力が働く部分もあって、思惑どおりに動かないのです。エジソンもアインシュタインも、研究者としての自分と家庭人としての自分とに折り合いを付けることが出来なかったのです。家庭から離れる時間をより多く持つことの出来た男でさえそうならば、より家庭的な重要な役割を担っている女に男と同

等の研究者活動を要求することは、公平なことなのでしょうか？

ですから、再度、このようなコンテキストで現れてくる女性は本当に優秀で努力している人に違いがないのです。そして再度、だから、女性の優れた研究者は少ないのです。この問題は、今行政が主導している“男女共同参画”路線の中で解決できるような簡単なものではありません。

5. まとめ

何事もそうですが、“男女共同参画”問題も、どこかから持ち込まれた命題を有り難いお経のように唱えるようなやりかたでは実効があがらないでしょう。今喧伝されている“男女共同参画”の根っこにあるイデオロギーからは距離をとり、私たち男女はどのように生きたいのかという、私たち自身の主体性において男女の共同を実践していくべきでしょう。

(文責：伊藤泰男)